昭和17年／北組山車　（五丁目昆歯科前）

懐かしの写真館

百石まつり

県南の最後を飾る豪華絢爛

昭和40年／肴町組山車

祭主・後列は供奉員

町指定無形民俗文化財　日ヶ久保虎舞

平成17年／藤ヶ森組山車

若宮八幡宮～土鼻神社の第1回例祭は、明治13年に行われ、豊年（若宮八幡宮）と大漁（土鼻神社）とを祈念し感謝したお祭りだったと伝えられています。

その後、明治22年に行なわれた行列には御神輿を中心に大神楽や豊年旗・大漁旗（船印九旗とも）の外に収穫物などがあったといわれています。

明治40年には北組と南組の山車が村祭りに参加し、平成16年には11台の山車と増え、装飾も華やかになりました。

また、太平洋の荒波を航海する漁民の守り神として崇められ「山の幸」「海の幸」を呼ぶと言われている日ヶ久保の虎舞は沿道を湧かせます。

懐かしの写真館

地曳網

古来からの伝統漁法

船　出

昭和30年頃／網袋に大漁の魚が

昭和初期／ナツボに山積された鰯

我が町の海岸一帯は、昔は市川浦・五戸浦・北浜とも称され、九十九里浜（千葉県）と対比された千石漁場でした。主として鰯が昔より取れ、海岸沿いの百石村（支村三沢村を含む）の海岸線に発達した漁村は「川目聚落」とも呼ばれ網元の納屋経営が次第に定着して開村したと言われています。

当地方の地曳網は、１６５４年頃紀伊・上方・房州の人々から各種の鰯漁法が伝えられたとされています。百石浜の地曳網の多くは大体土着の人が網主でしたが、一把に40～50人ほどを要することから、江戸末期までは季節的に、三戸郡・八戸・三本木・野辺地・岩手県北部から漁夫が雇われて来て、主に網主の納屋に寝泊りして地曳網漁等に従事していたといわれています。

鰯漁期ともなれば、遠くは七戸・十和田・五戸の各村々から農民達が馬や牛をひいて、この浜辺へ鰯を買いに来て、浜は人々でごったがえし、市をなしました。鰯は冬の長い当地方の生活にはなくてはならぬ唯一の貯蔵食でした。

近年は、地曳網は町の観光資源としても行われています。

近年観光としても地曳網を行うようになった